

第40回 現代世界の地誌的考察

■■ 現代世界の諸地域編 ■■

世界のさまざまな地域を見てみよう

～オセアニア～

監修・講師

菊地俊夫

学習のねらい

オセアニアはアジア大陸と北・南アメリカ大陸の属島を除いた太平洋地域であり、その領域には広大な海域が含まれている。しかし、オセアニアの陸地面積は領域全体の約6%を占めるにすぎず、その約86%はオーストラリア大陸になっている。この学習では、オセアニアの主要な陸地であるオーストラリアに焦点をあてて、移民の歴史と多文化社会の形成、および日本を含めたアジア諸国との農畜産物などの物や人の交流のいろいろな様子を学んでいく。

今回のポイント

- アジア諸国に輸出される農畜産物
- オセアニアの移民の歴史と多文化社会
- 物や人の交流を深める日本とオセアニア

■■ アジア諸国に輸出される農畜産物 ■■

オーストラリアの農牧業は、国内市場が農産物の生産量に対して小さいため、典型的な輸出指向型の産業になっている。その大きな特徴は低コストで大量の農産物を生産し、北半球の端境期に市場出荷できることにある。農産物のなかでも、羊毛、小麦、肉類、砂糖は農産物輸出額の4分の3を占め、重要な輸出品目である。これらの農産物の輸出先をみると、かつてはイギリスを中心としたヨーロッパ諸国が主要輸出国であったが、イギリスのEC（ヨーロッパ共同体）加盟やECの共通市場の確立を契機にして、アジア諸国や中東諸国がオーストラリアの農産物の輸出先として重要になった。特に、日本はオーストラリアの農産物市場として最も重要であり、オーストラリアは霜降り牛肉やジャポニカ米など日本人の好みにあった農産物の生産にも努めている。近年では、中国や韓国などへの農産物の輸出もオージービーフを中心に増加しており、東アジアの農産物市場はオーストラリアにとってさらに魅力的であり重要になっている。

■■ オセアニアの移民の歴史と多文化社会 ■■

イギリスからの最初の移民が1788年にシドニーに上陸し、オーストラリアの移民の歴史が始まった。オーストラリアの移民は1851年のゴールドラッシュを契機に急増したが、その90%以上はイギリスからの人びとであった。他方、ゴールドラッシュの鉱山労働者として中国人も多く移住するようになり、ゴールドラッシュ後には彼らが白人の職場を奪い、白人の生活水準を低下させるなどの社会不安も高まった。そのことが、有色人種の移民を制限し

て、白人だけのオーストラリアを維持しようとした白豪主義の契機となった。白豪主義の政策が廃止される 1970 年代までのオーストラリアでは、南ヨーロッパや東ヨーロッパからの移民が一時的に増えたこともあったが、移民のほとんどがイギリスを中心とする人びとであった。1970 年代以降、移民に対する人種や文化、出身国などによる制約がなくなったため、オーストラリアと距離的に近いシンガポール、マレーシア、フィリピン、タイなどの東南アジアや、ホンコンからの中国人の移民が増加し、国民とその文化は多様化している。また、オーストラリアはベトナムや東ヨーロッパからの難民を積極的に受け入れており、そのことも国民や文化の多様性を高めている。現在、オーストラリア国内では約 160 の国や地域から移り住んだ人びとが生活しており、それぞれの民族固有の文化を尊重し合う多文化社会が形成されている。

■ ■ 物や人の交流を深める日本とオセアニア ■ ■

APEC（アジア太平洋経済協力会議）はアジア・太平洋地域の経済協力を強化するためにオーストラリアが提唱して組織された。これは、オーストラリアの人びとの意識が「アジアのなかのヨーロッパ」から「アジアの一員」へと変化してきたことを物語っている。また、アジアとの結びつきの強化は、アジアからの移民や投資、あるいは人・もの・金・情報の交流の増加とも関連している。またイギリスの EC 加盟を契機に、オーストラリアと日本を中心とするアジア諸国との貿易が拡大したことも重要な背景のひとつである。オーストラリアはアジアとの関係のなかで、とりわけ日本との関係を重視してきた。日本とは多くの直行便の航空路線で結ばれ、時間的な距離も 8 時間から 9 時間半と身近な存在であり、一次産品の輸出や工業製品の輸入といった貿易の面でも深い関係にある。観光の面でも、オーストラリアは美しい自然環境と治安の良さから、日本人の行きたい国の上位に常に位置づけられ、年間約 40 万人以上の日本人観光客が訪れ、オーストラリアの経済や人びとの生活を支えている。また経済的な関係以外でも、東京都とニューサウスウェールズ州のような姉妹州やメルボルンと大阪市、あるいはシドニーと名古屋市のような姉妹都市も 100 組以上結ばれ、文化・教育やスポーツの面でも交流が進んでいる。